

短報 Short Report

大学周辺住民によるキャンパスの利用と評価
— 広島大学東広島キャンパスを事例として

岡橋秀典¹・番匠谷省吾²

Utilization and Evaluation of University Campus by Neighboring Residents:
A Case Study of the Higashi-Hiroshima Campus of Hiroshima University

Hidenori OKAHASHI¹ and Shogo BANSHOYA²

要旨: 本稿では、広島大学東広島キャンパスの周辺住民がどのようにキャンパスを利用し、評価しているかを明らかにするために、アンケート調査による考察を行った。周辺住民は、自然に恵まれ、美しく、開放的なキャンパスとして、基本的に好印象をもっている。キャンパス訪問は、利用の満足度評価は、施設利用においても、行事への参加においても、概ね良好である。さらに、広島大学の立地については肯定的に受け止める住民が多く、良い点として、学生の存在や学生活動が地域に活気を与えていることが高く評価されている。しかし、悪い点として学生のマナーの悪さが強く指摘されていることには留意が必要である。他方、キャンパス内に入っても良いことを知らなかったという住民が未だあり、大学は周辺住民への広報をもっと強化する必要がある。本分析結果は、今後の広島大学総合博物館の活動にも示唆を与えている。博物館は社会に開かれた大学の窓口としても役割を果たさうという点である。

キーワード: 大学, 大学キャンパス, 地域貢献, 周辺住民, 広島大学

Abstract: We clarified using a questionnaire survey how neighboring residents of Hiroshima University utilize the university campus and what their evaluation was of the campus. The residents reportedly have a good overall impression of the campus, with its natural, beautiful and open environment. Most of the evaluations on satisfaction were good, not only regarding campus facility use but also for their participation in the events. In addition, many inhabitants rated the university campus highly. The presence and the activities of students were thought to add vitality to the local community. However, we noticed that the students were evaluated as having bad manners, which was commonly pointed out by the residents. Interestingly, some inhabitants did not realize that they were allowed to enter the campus. It is crucial for the university to provide public information to neighboring residents. The results suggest the direction the Hiroshima University Museum should take in the future. The university museum can play a role as a gateway for the university to open itself to the society.

Keywords: University, University campus, Contribution to locality, Neighboring residents, Hiroshima University

I. はじめに

大学が独立行政法人となって以降、各大学において社会貢献や地域貢献が重視されるようになった。公開講座をはじめとして、様々な活動に取り組まれているが、地域との交流をどのように深めていくかについては、まだまだ検討が必要なように思われる。そもそも大学の有するキャンパスそのものを地域にどのように開放するのか、それを通じてどのように交流を深める

かは、大きな課題であろう。この点を推進するには、まずキャンパス利用の実態と評価・意向を十分に把握する必要がある。

広島大学は、1982年の工学部を嚆矢として、東広島市への統合移転を進め、10年以上を経た1995年に予定部局の移転を完了した。その後、さらに10数年を経過し、今日ではキャンパス内に、1000席を擁するサタケメモリアルホールや、レストラン等のある学生会

1 広島大学大学院文学研究科 : Graduate School of Letters, Hiroshima University

2 広島大学大学院文学研究科大学院生 : Graduate Student, Graduate School of Letters, Hiroshima University

館、カフェなど、多様な施設が整備され、アメニティ機能の充実が図られている。東広島キャンパスには門や塀がなく、元来、学外に開かれたオープンな構造特性をもっているが、こうした機能の充実により学外との交流がさらに高まっていくことが期待される。

他方、2003年に設立された広島大学総合博物館は、「キャンパスまるごとミュージアム」を掲げ、本館展示だけでなく、恵まれたキャンパスの自然を学内外の人々に体験してもらうべく、活発な活動を行っている。部局サテライトの展示、講演会や観察会（フィールドナビ）を実施するほか、大学案内を行うキャンパスガイドにも協力している。それゆえ、今後の活動にとって、周辺住民にどのようなアプローチをしていくのかは重要な検討課題となる。

以上から、本稿は、キャンパスを通じた大学と周辺住民との交流のあり方を検討するために、広島大学東広島キャンパスを事例として、徒歩圏内の周辺住民のキャンパス利用の実態と評価構造をアンケートにより明らかにすることを目的とする。

II. アンケートの方法と回答者の属性

1. アンケートの方法

本アンケートは、東広島キャンパスに近接し、学生街的機能を有する下見地区（図1）を対象として、2009年1月に実施した。キャンパスから直線距離で約1km以内の世帯にアンケートを直接配布し、同封の返信用封筒により郵送で回収する方法を採用した。この狭い範囲に対象を限定したのは、徒歩で大学までアクセス可能な範囲であり、それゆえ多様な形のキャンパス利用が検出できると考えたためである。回答は、配布した世帯の家族のうち、世帯主を含む20歳以上の世帯員1人が行うように依頼した。200世帯に直接配布したところ、109票が回収された。したがって、回収率は54.5%となり、この種の調査としてはかなり高い回収率となっている。これは、キャンパス周辺に居住する人々にとって、大学が身近な存在であり、ふだんから関心を持つ人が多いことによると考えられる。

2. 回答者の属性

まず、アンケート回答者の属性をまとめておく（表1）。回答者109名中、3名は性別の回答がなく、残る106名については男性が50名、女性が56名であった。女性がやや多いが、両者の数に大きな差はない。

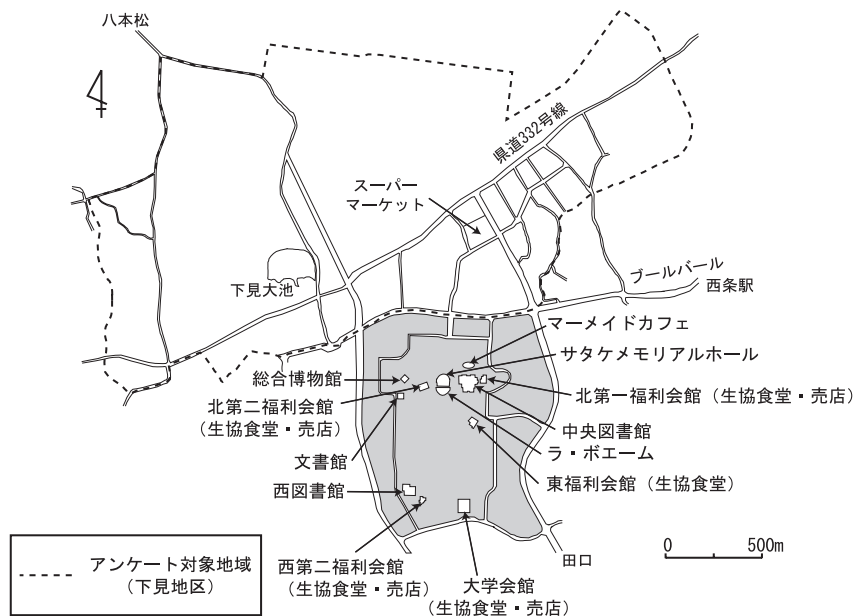


図1 広島大学キャンパスと対象地域の概観

表1 回答者の性別と年齢

	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代	80歳代以上	無回答	計
男性	1	1	7	6	16	13	6		50
女性	3	11	8	13	11	7	3		56
無回答						1	1	1	3
計	4	12	15	19	27	21	10	1	109

資料：2009年1月実施のアンケート調査による。

年齢構成をみると、20歳代（4名）、30歳代（12名）、40歳代（15名）、50歳代（19名）、60歳代（27名）、70歳代（21名）、80歳代（10名）という分布であり、基本的に年齢層が上がるとともに回答者が多くなっている。60歳以上の高齢者は総計で53%あり、半分以上を超えている。ただ、それは男性で60歳以上が70%を占めることによっており、女性だけでは60歳以上は35%に留まり、幅広い年齢層に分布している。その一方で、20歳代は男女を問わずかなり少ないことに留意しておく必要がある。

現住地での居住年数は、「20年以上前から」が42名で約40%を占め、「生まれてからずっと」が26名で24%と、ともに長く居住する両者で60%以上を占める（表2）。これに5年以上の人々を足すと、90%

を占める。回答者には、長年、下見地区に居住する人、特に高齢者が多いと考えられる。

表3により職業の分布をみると、男性では無職と農業が多く、これらで約半分を占める。これは上述したように、回答者の年齢が60歳以上の高齢層に偏っていることが大きな原因の一つである。女性では専業主婦が半分を占めるが、この場合は年齢層に大きな偏りはない。この他、男性では会社員とその他自営業が、女性ではパート・アルバイトがやや目立つ。

Ⅲ. キャンパスの訪問とイメージ

1. 訪問の頻度と目的

最初に、広島大学東広島キャンパスへの訪問頻度について検討する（表4）。まったく訪れたことがない

表2 回答者の現住地での居住年数

	生まれてから ずっと	20年以上前から	10年以上 20年未満	5年以上 10年未満	2年以上 5年未満	2年未満	無回答	計
男性	19	19	5	3		4		50
女性	5	23	10	12	3	3		56
無回答	2						1	3
計	26	42	15	15	3	7	1	109

資料：2009年1月実施のアンケート調査による。

表3 回答者の職業

	会社員	公務員	教員	企業 経営者	農業	その他 自営業	パート・ アルバイト	専業主婦	無職	その他	複数兼業	計
男性	6	1	2	3	12	5			15	3	3	50
女性	4	1	1		4	1	7	28	4	5	1	56
無回答						1			2			3
計	10	2	3	3	16	7	7	28	21	8	4	109

資料：2009年1月実施のアンケート調査による。

表4 性別年齢階層別にみた東広島キャンパスへの訪問頻度

	ほぼ毎日	1週間に 1～3回	1ヶ月に 1～3回	1年に 1～3回	数年に1回	まったく ない	無回答	総計
20歳代				1				1
30歳代						1		1
40歳代			2	2	2	1		7
50歳代			2	4				6
60歳代		1	2	10	3			16
70歳代		2	3	4	4			13
80歳以上		1	1	3		1		6
男性計		4	10	24	9	3		50
20歳代	1			1		1		3
30歳代	1		1	4	2	3		11
40歳代				5	3			8
50歳代	1		2	2	6	2		13
60歳代			3	7	1			11
70歳代	2		1	3	1			7
80歳以上				1	1	1		3
女性計	5		7	23	14	7		56
70歳代					1			1
無回答							1	1
80歳以上			1					1
無回答								1
無回答計			1		1		1	3
総計	5	4	18	47	24	10	1	109

資料：2009年1月実施のアンケート調査による。

人が10名を数えるが、全体の10%に満たずごく少数である。しかし、訪れたことがある人も、年に1回～3回が半分弱、数年に1回が20%強で、全体として訪問頻度はそれほど高くない。ただ、中には頻繁に来訪する、ほぼ毎日とか毎週訪れる人も10%弱みられた。

性別・年齢との関係でみると、ほぼ毎日訪問している5名は全員が女性である。しかし、そのうち50歳以下の3名は、仕事で広島大学に働きにきている。他方、広島大学を全く訪ねたことがない10名は、60歳未満の青壮年層が多い。全体としてもっとも多いのは、年に1回～3回の来訪者であるが、これらの人々には、男女別、年齢別で大きな偏りはない。

次に、東広島キャンパスを訪れた目的について尋ねた(表5)。最も多かったのが、「喫茶や食事をする」ためであり、それに続いて、「散歩する」ため、「キャンパス内での学生主体の行事に参加する」ため、「キャンパス内での講演会・展示会に出席する」ためがほぼ同数で並ぶ。どの項目も30%前後のシェアが得られた。学生主体の行事の具体例としては、大学祭・文化祭・ゆかたまつりが多い。また講演会・展示会に出席する場合の具体例として、サタケメモリアルホール、講演会、コンサートがあげられている。

回答者の年齢層とクロスしてみると、散歩をするのは60歳代、喫茶や食事をする項目については50歳代(30歳代も多い)、キャンパス内での学生主体の行事に参加するのは60歳代～70歳代、キャンパス内での講演会・展示会に出席するのはどの年齢層からも多かった。若い世代は喫茶や食事などでキャンパスを利用するのに対し、高齢者層は演奏会や大学祭などでキャンパスを利用することが多いということが判明した。余暇活動を楽しむため、そして趣味や生涯学習のためにキャンパスを利用する人々が多いといえよう。

2. キャンパスのイメージ

次に、広島大学東広島キャンパスに対するイメージについて、回答結果を検討する。ここではセマンティック・ディファレンシャル法(SD法)による調査を実施した。この方法は、「美しいー見苦しい」、「自然なー

人工的な」、「活気があるー活気がない」のように、両極性をもつ形容詞対をあらかじめ与え、それらにそってキャンパスに対してもつ印象を評定してもらうものである。表6のように1から5まで5つの評点があってそれらから選択する形をとる。どちらの形容にも偏らない平均的な評定が3であり、5あるいは1に向かうほどそれぞれの形容への強い肯定的な評価となる。

まず、1～5の五段階評価に、それぞれ1～5の点数を与え、回答者の平均値を出してみた。この質問では、すべて左側に良いイメージの形容詞を置いているので、数値が小さいほど肯定的な評価となる。男女ともに、どの項目も3未満の数値になっていて、基本的に良いイメージを抱いていることがわかる。男女別にみると、男性では「美しい」がもっとも高く、「開放的な」、「自然な」というイメージが強く、女性の場合は、「自然な」がもっとも高く、「美しい」、「開放的な」、「よく手入れされた」、「活気がある」が高評価を得ている。そして、すべての項目において、女性の方で数値が小さく、肯定的な評価を下していることがわかる。男女を通じて、特に評価の良くないのは、「わかりやすいーわかりにくい」という項目であり、キャンパスがわかりやすくなるような改善を要する。

平均値ではなく、五段階評価に注目すると、男性は女性に比べて、強い肯定である「かなり」の割合は総じて少ない。それに対して女性では、「開放的な」、「自然な」、「美しい」、「活気がある」に強い肯定がみられる点が注目される。

最後に、訪問頻度とイメージ評価との関係のみておきたい。訪問頻度によって差がある項目をあげる。「自然なー人工的な」では、訪問頻度が高い場合は「自然な」の回答が多いが、月1～3回以下の訪問頻度が少ない層では「人工的な」の回答が少ないながらもある。「魅力的な」、「活気がある」、「よく手入れされた」についての強い肯定は、むしろ訪問頻度の少ない層の方にみられるのは、やや不思議である。「開放的な」は訪問頻度が高い層で強く肯定されている。「わかりにくい」とするのは、訪問頻度が少ない層が多い。

表5 回答者の訪問の目的

	散歩	喫茶・食事	図書館	総合博物館	図書館・総合博物館以外の施設利用	キャンパスツアー	仕事関係	学生主体の行事に参加	講演会・展示会に出席	検定・試験	その他
男性	18	9	7	3	3	3	9	11	15	0	0
女性	12	24	6	5	8	1	5	19	14	1	1
無回答	1										
計	31	33	13	8	11	4	14	30	29	1	1

資料：2009年1月実施のアンケート調査による。

表6 東広島キャンパスのイメージ

a: 実数		かなり	やや	どちらでもない	やや	かなり	不明	平均
男性	美しい－見苦しい	9	25	14			2	2.10
	自然な－人工的な	10	24	7	6		3	2.19
	活気がある－活気がない	4	19	19	5		3	2.53
	魅力的な－つまらない	8	14	22	3		3	2.43
	よく手入れされた－手入れされていない	9	18	15	4	1	3	2.36
	開放的な－閉鎖的な	12	20	12	3		3	2.13
	快適な－不快な	7	12	28			3	2.45
	わかりやすい－わかりにくい	5	9	18	13	1	4	2.91
女性	美しい－見苦しい	15	23	11	1	1	5	2.02
	自然な－人工的な	16	28	7	2		3	1.91
	活気がある－活気がない	15	19	13	3		6	2.08
	魅力的な－つまらない	10	21	18	2		5	2.24
	よく手入れされた－手入れされていない	13	26	10	3		4	2.06
	開放的な－閉鎖的な	19	19	10	2	2	4	2.02
	快適な－不快な	11	17	21	1		6	2.24
	わかりやすい－わかりにくい	10	9	19	12	3	3	2.79

b: 構成比		かなり	やや	どちらでもない	やや	かなり	不明
男性	美しい－見苦しい	18.0%	50.0%	28.0%			4.0%
	自然な－人工的な	20.0%	48.0%	14.0%	12.0%		6.0%
	活気がある－活気がない	8.0%	38.0%	38.0%	10.0%		6.0%
	魅力的な－つまらない	16.0%	28.0%	44.0%	6.0%		6.0%
	よく手入れされた－手入れされていない	18.0%	36.0%	30.0%	8.0%	2.0%	6.0%
	開放的な－閉鎖的な	24.0%	40.0%	24.0%	6.0%		6.0%
	快適な－不快な	14.0%	24.0%	56.0%			6.0%
	わかりやすい－わかりにくい	10.0%	18.0%	36.0%	26.0%	2.0%	8.0%
女性	美しい－見苦しい	26.8%	41.1%	19.6%	1.8%	1.8%	8.9%
	自然な－人工的な	28.6%	50.0%	12.5%	3.6%		5.4%
	活気がある－活気がない	26.8%	33.9%	23.2%	5.4%		10.7%
	魅力的な－つまらない	17.9%	37.5%	32.1%	3.6%		8.9%
	よく手入れされた－手入れされていない	23.2%	46.4%	17.9%	5.4%		7.1%
	開放的な－閉鎖的な	33.9%	33.9%	17.9%	3.6%	3.6%	7.1%
	快適な－不快な	19.6%	30.4%	37.5%	1.8%		10.7%
	わかりやすい－わかりにくい	17.9%	16.1%	33.9%	21.4%	5.4%	5.4%

資料：2009年1月実施のアンケート調査による。

以上のように、東広島キャンパスは、美しく、自然で、よく手入れされた、開放的なキャンパスとして、好印象のイメージをもたれていることが明らかとなった。東広島に移転後、キャンパスの整備が進み、郊外型の大学キャンパスとして成熟してきていることがうかがわれる。

IV. キャンパス内の施設とイベントー利用・参加と評価

1. キャンパス内の施設利用

学外から利用可能な大学内の主要施設として、生協食堂、生協売店、サタケメモリアルホール、マーメイドカフェ、ラ・ボエーム（学生会館レストラン）、広島大学歯科診療所、図書館、総合博物館、文書館の9箇所をあげて、利用経験の有無と満足度について質問した。

まず施設の利用状況について考察する（表7）。9施設中最も利用したことがある人が多かった施設は、サタケメモリアルホールであった。有効回答数109名中約60%の66名が利用したことがあると回答した。これはかなりの高い数値と言えよう。サタケメモリア

ルホールでは大学行事だけでなく、様々な行事が行われており、学外からも交流施設として有効に利用されているといえよう。以下、順に、生協売店（39名）、生協食堂（39名）、ラ・ボエーム（28名）、図書館（25名）、マーメイドカフェ（24名）、総合博物館（15名）、歯科診療所（5名）、文書館（4名）という順であった。生協の売店や食堂は4割弱の人が利用しており、組合員を対象とした施設ではあるものの、周辺住民にもある程度利用されていることがわかる。レストランやカフェも、外部から必ずしもわかりやすい場所ではないものの4分の1弱の人に利用されている。認知度をあげる工夫をすれば、さらに利用度はあがるように思われる。その点では、一般の方に利用可能な図書館や総合博物館は、一層、広報等の工夫が必要であろう。歯科診療所と文書館は、利用目的が限定されることもあって、かなり回答数が少なくなっている。

満足度をみよう（図2）。「満足している」と「どちらかといえば満足している」を合わせたものを、満足しているとみると、全般に高く、「どちらかといえ

満足していない」「満足していない」という不満をもつ回答は少ない。大学内施設に対する満足度は概ね良好といえよう。個別にみると、マーメイドカフェ、サタケメモリアルホール、ラ・ボエーム、図書館は、満足している人がいずれも60%を超え、比較的高い満足度を示している。これらに比べると、生協食堂(55%)、総合博物館(47%)、生協売店(41%)は、やや満足度が落ちる。総合博物館の場合、「満足している」と明確に述べる者が13%しかない点は留意すべきである。

最も利用率が高かったサタケメモリアルホールは、大学内で行われる講演や演奏会などへの出席のために利用するケースが多いと考えられる。利用率と満足度を男女別にみると、利用率は男女でそれほど大差はないが、満足度は女性が「満足している」「どちらかといえば満足している」を合わせて80%に達するのに対して、男性はやや低く66%に留まる。生協売店や食堂、ラ・ボエーム、マーメイドカフェといった飲食関係施設の利用率も高い水準となっている。ただし利用率には男女差がみられる。生協売店と食堂は男性の

表7 性別年齢階層別にみたキャンパス内施設の利用

	生協食堂	生協売店	サタケメモリアルホール	マーメイドカフェ 広島大学内店	ラ・ボエーム (学生会館 レストラン)	広島大学 歯科診療所	図書館	総合博物館	文書館
20歳代	1	1		1			1		
30歳代									
40歳代	3	3	4	1			1	1	
50歳代	2	3	3						
60歳代	6	6	9	2	1		5	2	
70歳代	5	8	11	3	4	1	2	2	
80歳以上	3	1	3	2	2		2	1	
男性計	20	22	30	9	7	1	11	6	
20歳代	1	1	2	1	1		1	1	1
30歳代	2	3	4	4	5	1	3	1	
40歳代			5	2	4		1	1	
50歳代	6	6	7	2	5		6	2	1
60歳代	7	5	11	3	4	3	2	3	1
70歳代	1	1	6	3	2			1	
80歳以上									
女性計	17	16	35	15	21	4	13	9	3
70歳代	1								
80歳以上									
無回答									
無回答	1	1	1				1		
無回答計	2	1	1				1		
総計	39	39	66	24	28	5	25	15	3

資料：2009年1月実施のアンケート調査による。

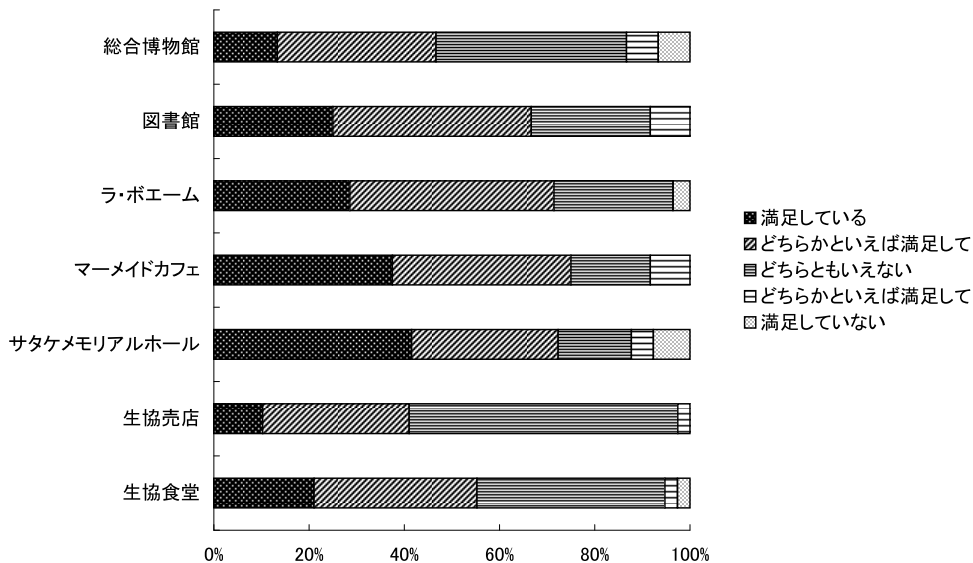


図2 キャンパス内施設利用の満足度
資料：2009年1月実施のアンケート調査による。

場合 40%強であるのに対して、女性は 30%前後にとどまり、他方ラ・ボエームとマーメイドカフェは男性が 20%弱であるのに対し女性はそれぞれ 27%と 38%であり、それぞれの施設の特性に対応して対照的な結果となっている。

2. キャンパス内の行事への参加

大学のイベントとしてあげた行事は、大学祭、ゆかた祭り、学内で行われる講演会・公開講座、学内で行われる演奏会、総合博物館の企画展（南極展、宮島展）の 5 つである。

キャンパス内の行事への参加についてみると、大学祭（54名）が最も多く、回答者のうち 50%の人が参加している（図 3）。かなり高い数字といえよう。以下学内の演奏会と学内の講演会・公開講座が 31 名と同数で続き、ゆかた祭り（26 名）、博物館の企画展（8 名）となった。

これらの行事への満足度をみるため、選択肢の番号を合計し、それを回答者数で割って平均値を出してみた。小さい数値ほど満足度が高くなる。学内の演奏会

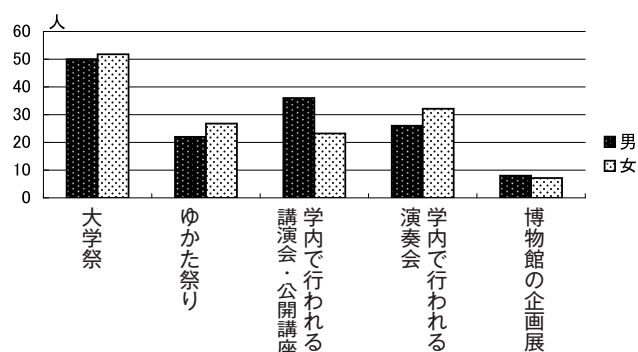


図 3 キャンパス内イベントへの参加
資料：2009 年 1 月実施のアンケート調査による。

(1.81) が最も高く、博物館の企画展 (1.88) がそれに次ぎ、それ以下は、学内の講演会 (2.09)、ゆかた祭り (2.27)、大学祭 (2.56) という順である。学内の演奏会は、サタケメモリアルホールを利用した催し（無料のものも少なくない）が数多く開かれていることが関係する。女性からは特に高い評価を得ている。博物館の企画展は参加人数では少ないものの、高い評価を得ている。大学祭は最も参加率が高い行事であるが、満足度自体はこの中では最下位である。

全体の傾向としては施設面と同じく、「どちらかといえば満足していない」「満足していない」という回答はきわめて少なく、学内の行事に概ね満足しているということがいえるだろう。施設としての満足度が最も低かった博物館だが、博物館の企画展の満足度は行事の中でも高い値を示している。また演奏会のみならず、講演会などもゆかた祭りと同等以上の参加率となっており、大学の研究などに関心を抱く住民が比較的多いといえよう。最も参加率が高い大学祭の満足度が最も低いという結果となっているが、大学祭は大学と周辺住民が交流する最大の機会であり、今後問題点をより明確にして、満足度を高めるような工夫が必要だろう。

V. 周辺住民にとっての広島大学

1. 大学に関する情報の入手

周辺住民の広島大学に関する情報の入手方法は（表 8）、ポスター（62）、新聞（50）が多い一方、テレビ（12）、ウェブページ（12）、ラジオ（3）から情報を得ている人は少ないことがわかる。男女別にみると、男性では、新聞、ウェブ、テレビが女性よりやや多いのに対し、女性では「その他」をあげるものの多さが目立つ。

表 8 大学に関する情報の入手媒体

		新聞	web	テレビ	ラジオ	ポスター	その他
男 性	20 歳代	1					
	30 歳代		1				
	40 歳代	5	1			3	1
	50 歳代	3	1			5	
	60 歳代	7	3	2		7	6
	70 歳代	8	1	2		11	4
	80 歳以上	5	1	4	1	3	2
男性 計	29	8	8	1	29	13	
女 性	20 歳代	1	1			3	1
	30 歳代	4				4	6
	40 歳代	2	1	1		4	4
	50 歳代	6				8	3
	60 歳代	6	1	2	2	9	6
	70 歳代	2	1	1		4	2
	80 歳以上					1	1
女性 計	21	4	4	2	33	23	

資料：2009 年 1 月実施のアンケート調査による。

知人の紹介, チラシ・ビラ, 市の広報誌が比較的多い。

2. 評価と要望

周辺住民に対して, 近くに広島大学があることで, 良い点と悪い点のどちらが多いかを尋ねてみた(表9), 「良い点の方が多い」とする回答は59名と最も多く, 全員の54%に達する。しかし, 「どちらとも言えない」も32名, 30%近くあることは, 容易にプラスの結論が出せないような問題点も存在することを示唆する。ただ, 「悪い点の方が多い」とはっきり述べる回答は4名のみときわめて少なかった。なお, ここでの評価は, 男女別, 年齢階層別にみても大きな違いはみられなかった。

この評価とキャンパスを訪れる頻度との関係のみをみよう(表10)。ほぼ毎日, 週に1~3回, 1ヶ月に1~3回程度大学を訪れる高頻度の訪問グループでは, 明確に「良い点の方が多い」とする者が80%近くで圧倒的に多い。しかし, 1年に1~3回程度, 数

年に1回, まったく訪れたことがない人となると, 「悪い点の方が多い」とする回答が含まれるだけでなく, 「どちらとも言えない」の割合が40%近くに達する。訪問頻度が高いほど大学の存在に対してより肯定的な評価となり, 訪問頻度が低いほど, 明確な態度を留保する傾向が強まると言えよう。

広島大学を訪れる頻度が少ない回答者ほど, 広島大学に対して良いイメージを持たないという特性からすると, より良いイメージを持ってもらうためには, 多くの人に広島大学を訪れてもらう必要があると考える。そのためには周辺住民に広島大学に関するより多くの情報を提供する必要がある。問6の結果からも分かるように大学のウェブページから情報を得ている人は少なく, どのようにすればウェブページを多くの人に利用してもらえるかも重要な課題になると考えられる。

最後に, 近くに広島大学があることによる良い点と悪い点に関する自由回答の結果を検討する。ここでは

表9 大学が立地することの総合評価

	良い点が多い	悪い点が多い	どちらとも言えない	無回答	計
20歳代		1			1
30歳代			1		1
40歳代	3		2	2	7
50歳代	5		1		6
60歳代	9		5	2	16
70歳代	7	1		5	13
80歳以上	4		2		6
男性計	28	2	11	9	50
20歳代	2		1		3
30歳代	4	1	6		11
40歳代	4		3	1	8
50歳代	8		4	1	13
60歳代	7		4		11
70歳代	4		2	1	7
80歳以上	2		1		3
女性計	31	1	21	3	56
70歳代		1			1
無回答 80歳以上				1	1
無回答計		1		2	3
総計	59	4	32	8	109

資料：2009年1月実施のアンケート調査による。

表10 大学立地の評価と訪問頻度

	良い点が多い	悪い点が多い	どちらとも言えない	無回答	計
ほぼ毎日	5				5
1週間に1~3回	4				4
1か月に1~3回	12		3	3	18
1年に1~3回	24	2	17	4	47
数年に1回	11	2	6	5	24
まったくない	3		6	1	10
無回答				1	1
総計	59	4	32	14	109

資料：2009年1月実施のアンケート調査による。

紙数の都合により、その具体的な回答はあげずに集約した形で紹介する。まず良い点については、80%強の91名が回答している。最も多いのが、若い人が多くて地域に活気があることを評価する意見であろう。それと関連して学生が行う様々な活動も肯定的に評価されている。また、学生の礼儀正しさなど生活態度をほめる意見もある。大学の施設の利用、行事の参加などで、大学を利用できる点も数多く指摘されている。そして、大学ができたことにより周辺が開発され、周囲に店や病院などができ便利になったことも評価を得ている。

次に悪いと感じている点の具体的な内容をみてみよう。全体の約70%に当たる77名が記入している。良い点に比べるとバリエーションが少なく、基本的に大学生のマナーの悪さを指摘するものがほとんどである。自転車・バイク・自動車の交通マナーの悪さ、深夜の迷惑な騒音、飲酒時のマナーの悪さ、ゴミの不法な廃棄などを指摘している。一方で学生の礼儀正しさをほめる意見もあるだけに、残念なことである。

最後に東広島キャンパスについての意見や希望（自由回答）については、全体の半数近い53人から回答があった。まず、最も多かったのは、交流をしたいが大学についての情報入手手段が分からない、広報の工夫を望む、もっとオープンにといい、広島大学に対する関心を持ち交流を望む中での要望である。さらに、意外にも「キャンパス内に入っても良いことを知らなかった」、「キャンパス内のことを知らないで入りにくい」といった意見もみられた。これらの人々にとっては、未だ、大学は近くて遠い存在なのであろう。現実以上に、閉ざされた大学というイメージや、敷居の高さがあり、これらが影響を与えているに違いない。最後に無視できないのは、大学立地による悪い点で指摘された、交通マナーの悪さや騒音など、学生のモラルに関する要望がここでも数多く指摘されていることである。

以上の回答結果から、周辺住民の中には情報さえ入手できれば交流したい人が多数いることがわかる。大学はもっと地域の実態をふまえたきめ細かい広報に乗り出す必要がある。たとえば、町内会の回覧板の活用、商業施設や公民館への広報コーナーの設置など、地域に出かけて働きかけることが必要であろう。その一方で、学生のモラルに関する厳しい意見も多いので、これらについても大学が何らかの形で改善に努める必要があるだろう。一方的に広報するだけでなく、地域の生活改善にも尽力することで、これまで以上に地域と一体になった大学になるように思われる。

VI. おわりに

本稿では、広島大学東広島キャンパスの周辺住民がどのようにキャンパスを利用し、評価しているかについて、アンケート調査による考察を行った。現在の東広島キャンパスは移転完了後10数年たち、整備が進んだ結果、多様な施設を擁し、郊外型のキャンパスとして成熟してきている。周辺住民からも自然に恵まれた美しい開放的なキャンパスとして好印象をもたれている。周辺住民のキャンパスへの訪問は、散歩や、何らかの行事への参加、もしくは施設の利用といった余暇・学習など多様な目的からなる。その満足度評価は、施設利用においても、行事への参加においても、総体としては概ね良好であるが、個別にみると課題が認められる。

広島大学の立地に対する総合評価を、良い点と悪い点のどちらが多いかという形でみると、「良い点の方が多い」とする回答は半分強に達し、肯定的に受け止めている住民が多い。しかし、「どちらとも言えない」が30%近くあることは、学生のマナーなどのように簡単に許容できない問題点も存在するからであろう。また、広島大学を訪れる頻度が少ない回答者ほど、広島大学に対して良いイメージを持たないという傾向があり、なるべく多くの人に広島大学を訪れてもらう工夫が必要と考える。

広島大学の立地による良い点として、学生の存在や学生活動が地域に活気を与えていることが高く評価されている。それに対し、悪い点として学生のマナーの悪さが強く指摘されている。ただ、回答者全体としては広島大学に対して好印象を持ち、交流を望む声も強くある。その一方で、キャンパス内に入っても良いことを知らなかったという住民も未だあり、大学はまだ近くて遠い存在であることの認識も重要である。

このような分析結果は、今後の広島大学総合博物館の活動にもいくつかの示唆を与える。まず、博物館は住民のキャンパス利用や大学との交流の窓口となりうるということである。実際、博物館入館者の中には、この機会に大学のキャンパスを訪ねられてよかったとの意見が結構多い。学外者にとっては、博物館は学部・大学院よりはるかに垣根の低い存在なのである。次に、地域への広報を回覧板などの利用によりもっときめ細やかに行うこと、さらに観察会や出前博物館などにより積極的に学外へ活動を展開させることも課題であろう。最後にその地域に関わるテーマをとりあげ研究し展示することも重要である。大学に近接する下見地区の場合は、キャンパス自体がその村落領域内にあるため、キャンパス造成前の村の姿、その後の村の変貌を研究する意義は特に大きい。住民と協働して調査し、

その成果を企画展として扱うことも一考であろう。

最後に、今回のアンケート調査から判明した広島大学の問題点をあげておく。一つは、キャンパスの中が外部者にはわかりにくいことである。これについては大学を含めた周辺地域の地理情報（例えばわかりやすい地図）をキャンパス近接地域に置くなどの対策が考えられる。二つ目には、学生主体の行事の満足度が比較的低いという点がある。学生主体の行事は、周辺住民の多くが広島大学を訪れる重要な機会なので、もっと満足度をあげていくことが必要である。問題点の三つ目は、学生のマナーの悪さという点である。近くに広島大学が立地することで生じている悪い点として、半数以上の人々が交通、騒音、ゴミに関するマナーが守られていないことを指摘しており、この問題が広島大学周辺の居住者にとっていかに重大な問題であるかを表している。大学としてもこれに対するメッセージの発信が求められよう。

以上の様に、今回広島大学の周辺に居住する人々へのアンケートを行った結果、広島大学周辺住民の広島大学の利用状況、広島大学に対する意見、広島大学と地域住民との間にある問題点などを明らかにすることができた。これらには、総合博物館の活動に資する内容もあり、今後の検討課題としていきたい。

【付記】

本論文の分析に用いたアンケートは、2008年度後期に岡橋が担当した「地域調査法演習」（文学部）の授業で実施したものである。今回の論文作成に当たり、アンケートの再集計を行い、新たに分析を行った。共著者の番匠谷は本授業のTAを勤め、本論文のとりまとめにも関わった。最後に、アンケートにお答え頂いた皆様に感謝申し上げます。

(2009年8月31日受付)

(2009年10月26日受理)